

## So phantastisch...

寺 尾 格

岡山県総社市で生まれて、三か月で東京に引っ越したそう。新幹線の無い時代に、乳飲み子と四歳の兄を連れての長距離移動なのだから、まだ若かったはずの親の苦労を思わざるを得ない。阿佐ヶ谷の小学校に入学したが、二年生の春には山梨県甲府市にいた。そして中学入学は神奈川県大和市である。それ以後は神奈川県内ではあるものの、引っ越しを五回も経験している。ご出身は?と尋ねられると、いつも答えに窮する。

生来、虚弱であり、高校時代の体重は五十キロをかなり下回るガリガリで、すぐに風邪をひいた。大学に入ると、何をトチ狂ったのかワンゲル部に誘われて、特に大学一、二年生の頃はほとんど授業には出ず、山にばかり行っていた。おかげでずいぶん健康になった。

ドイツ語の授業にも、ほとんど全く出ていなかったの、まあ独学に近い。自分なりの勉強はしたので、単位獲得の試験には通ったものの、さまよっていたのは山だけではなかったらしい。経済学部の卒業に五年をかけて、もう一度、独文科に入りなおした。その時にはドイツ語ができると思っていたのだから、始末が悪い。ところが渡された小説のテキストがサッパリわからない。たとえ難しい部分を訳すことができたとしても、その直後に「あまりに初歩的なミスだから・・・」と、ケタケタと笑われた。改めて文法書をしていねいに読み直すと、知らないことが幾つも出てくる。自分勝手な独学の欠点が見事に現れて、天狗の鼻がポッキリと折られた。今では良かったと思っている。

専修大学のお世話になった一年目に、昭和から平成に移った。おかげで入

職年限を指折り数える必要が無い。思い出すことは数限りなくあり、学生の相手は楽しかったし、同僚との付き合いも大変ではあったが、やはりおもしろかったと言える。個人的な研究と教育はともかく、大学というシステムに関わる仕事では、三つほどの自負がある。第一に教養改革を通じて、学部を越えた全学システムへの道筋をつけたこと。第二に CALL 教室の機器更新を通じて、情報センターとの統合の道筋をつけたこと。そして第三に国際コミュニケーション学部の新設を通して、大学の国際化への道筋をつけたこと。いずれにも「語学教育に冷たい」専修大学の悪しき伝統主義と、効率一辺倒の言語道具主義に対する闘いという通奏低音が流れている。少なくとも三十年前よりは、いくらかは雰囲気が悪くなったと信じたいのであるが、どうだろうか？

淡々と過ごすはずであった最後の年にコロナ騒ぎとなり、激動の二十一世紀を否応なく実感させてくれた。スマホも持っていない昭和世代には、ほとんどヒステリーになりそうなほどの Web 対応の悪夢であったが、同時に新しい可能性を強制的に学ばざるをえない良い機会ともなった。明らかに大学教育は変わるであろうし、変わらざるを得ない大変な状況ではある。しかしながら大変でない時代があったらどうか？と、せめては精いっぱいのエールを送りたい。

最後の決まり文句を繰り返すのは愚であるとは思いつつも、「ああ、もっと勉強しておけば良かった!」。まだ読んでいない多くの本の山に登ることを楽しみにしながらも、しかし脚力と視力の衰えとの競争になるなあ・・・というのも確かで、「暦日は短促にして、学道は幽遠なり」という道元の言葉をかみしめている。

皆々さま、ありがとうございました。